

ヨーロッパのチベット學

山口 瑞鳳

戰後、チベット學は非常な勢で發展した。

殊に、中國がチベットをその支配下にいれてから可成りの數のチベット人が國外に亡命し、彼等のうちから特に選ばれた人々が各國に流れ出て夫々の國でこの學問の進歩に貢獻した。ロックフェラー財團が援助して各地にチベット學研究センターを設けたが、そのもたらした寄與はまことに大きいものがあつた。

今日のヨーロッパでは、チベット學 *Tibetologie* とかチベット學者 *Tibetologue* といつても、別段人にあやしまれないような言葉に對應する内容が出來上りつつある。チベット學が一戸を構える迄に發達したことは、チベット學を身のうえとする者にとつてはまことによろこばしいことである。

從來、殊に日本のチベット學は、印度學というより、むしろインド佛教學の補助學科としての流れがその主流をなしてきた。今日で

も、なおこの實狀は變つていない。しかし、

他方にもう一つの流れがあつた。それは東洋史學の一部門として發展したものである。假りに前者をインド學系の、後者をシナ學系のチベット學と各々名づけておこう。これらに共通に起つたことは、補助學としての追求では、いつれの系統のチベット學でも、もはや何も新しいことが出てこないところ、いはば頭打ちの状態に至つてしまつたことである。

今日、インド學系のチベット學では、この兆候がより歴然としていたように思われる。

大體、我が國で佛教學といへば、三國佛教と稱して、インド、シナ、日本の佛敎しかとりあげられない。又、チベット語の學習はあつても、チベット佛敎研究のためであつたことは殆んどなかつた。我が國の佛敎と直接のつながりこそなかつたが、歴史的にも、社會的にも非常に大きい役割を果したチベット佛敎、

更に、インド佛敎末期のすべてを傳へ、それらをして独自の發展を上げさせたチベット佛敎、この研究をながしるにして一體、佛敎一般を語ることは果して出来るのだろうか。

このような反省に立つて、本格的に本來のチベット語を修め、チベットそのものの宗教、歴史、社會、風俗等の一般についても廣いすぐれた認識をもちその上で各自の專攻科目を修めるのが今日のヨーロッパのすぐれたチベット學者の傾向である。その典型として例えば、イギリスでは、ロンドン大學の David Snellgrove、オックスフォード大學の J. E. S. Driver、オランダはライデン大學の J. W. de Jong、フランス極東學院の D. Seyfert Ruegg、もとベナレスのサンスクリット大學の Herbert V. Guenther、ドイツ、ミンヘン大學の Helmut Hoffmann の諸氏を擧げることが出来る。いずれも佛敎學者ではあるが、チベットの佛敎を通じて佛敎を語る、或は、佛敎學上の如何なる問題も、チベット佛敎の中で吟味するのを怠らないし、又、それが出来る新しいタイプの佛敎學者である。

他方、シナ學系のチベット學者は、シナ人の傳聞を記録したものなどの研究からは早くから脱皮していた。本來のチベット語にとり

くみ、チベット人自身による各種の記録を分析し、積み重ねていつた。彼等の数は少なかつたが、むしろ、今日のチベットプロバの研究方向を盛り上げていつた観がある。たとへば、

パリ Ecole des Hautes Etudes の Rolf A. Stein 教授(宗教學)はこのケースを代表

表し、ローレ・LAMEO の Luciano Petech 教授(東洋史)と共に、今日西歐の最も指導的なチベット學者である。今、指導的な學者といつたが、有名な Tucci 教授はこの點も含めてあらゆる意味で別格的存在である。同教授の最大の業績はこれまでのチベット學の成果を綜合整理して將來のチベット學の色々の方面、様々の道をこと細かく明示したところにあるだろう。今日も尙お、第一線に立つて發掘に探險に壯者を凌ぐ活躍を續けていることは周知のところである。

門下には、Petech 教授をはじめ、先にくた Snellgrove、米國のワシントン大學の Wylie などの諸氏が輩出している。早逝を惜まれた A. Ferrari 嬢もその一人である。

この Tucci 教授と並んで、違つた意味で、現在、西歐きつてのチベット通といわれるの

は、イギリス(スコットランド)の Hugh Richardson 氏である。長いチベット滞在の體驗を通じて得られた文化一般の造詣は高く評價されている。既にいくつかのすぐれた著作—碑文の研究、カルマバの歴史、チベット史(特に近代史)—も公刊している。

○

チベットは古くから禁斷の國として數多くの探險家の夢をさそつた。従つて、この地を訪れた人々、滞在した人々の記録は夥しく、今尙お、この種の出版物はあとをたたない。

實際、主としてこの種の人々のうちからチベット學の基本になる業績が現れはじめたのである。先ず、Osoma de Körtös のチベット語文法(1834)がそのはしりをつとめた。ついで、約三十年を経て、Schlagintweit の著作、更に、十年遅れて Yäschke の字典が世に出た。この頃から、チベット學は次第に人を得て活氣を呈し始めた。即ち、Sarat Candradas, L. A. Waddel 等が輩出したのである。一八九九年には Desgodins 其の他による字典が、續いて一九〇二年には Das の字典が出版された。

この頃、我が國から始めての河口慧海師の入藏があつた。少し遅れて青木文教、多田等

觀先生等がチベットに入つた。同じ頃、イギリスの Charles Bell, Macdonald フランスの David-Neel などもこの國を訪れた。このうち、十一年を Sera theg chen glin の正規の學僧として過した多田等觀先生は十三世ラマに最も近く、將來したチベット文獻は、その量においても質においても世界一のものであつた。

この一九〇〇年代からチベット學は本格的な研究時代に入つた觀があつた。當時の代表的存在は Francke, Lauther の「ダライラマの歴史」をかいた Schulemann もこれに加えられよう。三〇年代になると Bell の三部作 David-Neel 等のチベット紹介が續いて現れた。同じ頃、既に Jacques Bacot, G. Ch. Toussant, F. W. Thomas, G. Tucci, 等がチベット學の主流を構成しはじめた。

又、我が國でも大谷大學の北京版カンジュール・目録が出版され、次いで多田等觀先生がデルゲ版カンジュール、テンジュールの總目録を完成した。これらはチベット學の發展に寄せた我が國の初の貢獻だつたがおそらく、現在迄の最高の奇蹟でもあろう。

四〇年前後には、Bacot, Toussant, Thomas のグループがチベット古代史にとりく

み、特に燉煌チベット文書の價值をはつきり世に示した。他方、イタリヤでは Tucci 教授が Indo-Tibetica を發表し續け、Petech 教授が新たに學界の列に加わつた。又 G. N. Roerich 教授もこの頃チベット學界に登場した。

一九四九年には、Tucci 教授の Tibetan painted scrolls 三卷が刊行されて、チベット學はここに一時期を劃することになった。戦前と戦後の境、過去と現在のチベット學界の區切りがつけられた。確かに、この書の二卷を埋める論述は、チベット學の集大成であり、Tucci 教授をえなくして世に出ない名著である。換言すれば、今日のチベット學はすべてここから出發するところでも過言はないだろう。

一九五〇年代に入ると、フランスでは Stein 教授がチベット學界にも頭角を示し始め、ドイツは H. Hoffmann 教授が Quellen zur Geschichte der Tibetischen Bon-Religion を發表、イタリヤでは Petech 教授が名著 China and Tibet in the early 18th century を公にした。この著作は、チベット史研究に man thar (傳記) の分析がどの

より重要な重要性をもつたかという点を具體的に

教え、チベット史研究法の範を示したものと見える。G. N. Roerich の Ded ther ston po の全譯もこの頃出來た。又、五二年には、シナ學の權威 Paul Demiéville 教授が Le concile de Lhasa I を公刊、チベット學界に波紋を投じた。これはペリオの燉煌文書のうちにあつた「頓悟大乘正理決」なるものの徹底的解明を通じて吐蕃王朝の佛教受容がインド佛教とシナ佛教(禪—荷澤宗?)の二書擇一を迫られた事情を説明したものであつた。これに應え、五八年、Tucci 教授は Minor Buddhist Texts の第二卷を發表し、ヨッサの concile を bsam yas と修正し、併せて bsam yas 建立當時の諸問題を廣く論じた。とくに 'rin ma pa の *sa ma tse* の rdzogs chen pa がシナ佛教、禪の系統のものであるといふ注目すべき發言をした。

これに先だつて、Tucci 教授は The Tombs of the Tibetan Kings を發表、Yar khun 王朝の遺跡調査の結果を論じ、又、今こそわづむ二年には H. Richardson 氏が Ancient Historical Edicts in Lhasa を公けにして、共に古代史資料の缺を補つた。

一九五五年、R. A. Stein 教授は L'épée tibétaine de Gesar dans la version

Jamaïque を發表した。これはケサル物語のチベット語版のテキスト全文とその翻譯に脚注、更に、固有名詞、難解語句の説明を附し索引をつけたものであつた。次いで、五九年には、Recherches sur l'épopée et le barde au Tibet を出版し、チベットの叙事詩と吟遊詩人とをめぐつて、その該博なシナ學、チベット學の智識を駆使してケサル研究の集大成を遂げた。

一九五六年に、René de Nebesky-Wojkowitz の Oracles and Demons of Tibet を發表して、チベット佛教の諸神 chos skyon (dharma-pala) をはじめとする各種の神々の性格、由来それらにまつわる儀軌、民間に於ける信仰状態、更に、神託をめぐつてその考古と實體調査を通じての綜合的研究を世に示した。

同二年、Hoffmann 教授は Die Religionen Tibet を發表。他方 IsMEO 誌、J. F. Rock の The Amnye Ma chen range and adjacent regions を公刊して、青海地方現地踏査を通じての歴史地理の研究を發表した。

五八年には、Petech 教授が Aefonsa Ferrari 嬢の遺稿を整理補正して mk'yen

brtse's guide to the Holy places of Central Tibet を發表、六二年には Turrell V. Wylie 教授が 'The Geography of Tibet according to the 'Dzam. gling-rgyas-bshad を發表、つづれも、テキストと翻譯と

に詳細な注を附したものであるが、チベット歴史地理の重要にして基本的な業績となつた。

六〇年代、つまり今日のチベット學界には既にのべた人々の他に R. A. Stein 教授門下

の人々が加わりつつある。これらの人々のうちからは、先ず、A. Macdonald 夫人を擧げねばならぬ。彼女は六二年、'Le Mandala du Mahajrimulakalpa を出版、六三年

Préambule à la lecture d'un Gya-Bod yig-chän を發表した。後者はチベット史を得意とする彼女が本領を發揮したすぐれた論文である。六四年から、燉煌チベット文書の専門家であつた Lalou 教授退官の後を繼

ぐ、Ecole des Hautes Etudes 歴史、文獻學部でチベット學の講座を擔當している。夫若も同じく Stein 教授門下で、rosgrün を中心にした比較説話學を専攻している。

極東學院の David Seyfart Ruegg 氏はすぐれた佛教學者であるが、チベット學に於いても完全な専門家があつて、'Bu ston の傳

記(譯注)を ISMEO から出版することになつている。彼もチベット學では Stein 門下の一員である。

民俗學の C. Gest 氏は、既に、ネパール各地を何度か訪れ (Snellgrove 教授と共に) Dolpo の調査にも當つた。チベット語、ネパール語等に堪能で、その業績からも既に定評はあるが、この方面で將來を期待される第一人者である。

まだ大論文こそ出してはいないが、Blondeau 夫人は恐らくすぐれたチベット學者になる器である。現在は占星と醫學とについて研究をすすめている。

フランスのチベット學は、Bacot 教授以來、獨立のチベット學として發展を續けて來たが、Bacot 教授の後には、Lalou 教授と、Stein 教授とによつて繼承擴大された。Lalou 教授の席は六三年 Macdonald 夫人によつて占められた。いずれも Ecole Pratique des Hautes Etudes (≡ E. P. H. E.) (高等學術研究院、ナボレオンの命により専門學者の養成機關として設立された。)の中に講座をもち、Stein 教授は宗教學部に、Macdonald 夫人は史學文獻學部に屬する。又、六二年の秋

(新學年)からパリの外語大學(俗に東洋語學校というが、フランス以東の外國語を學ぶ學校である) Ecole des Langues Orientales Vivantes ではチベット語科が創設された。Stein 教授が擔當、初中上の三級にわかれ、チベットのラマによる演習は週八時間、昨年六月、はじめて初級の卒業生二名を出した。ここで教えるのは現代チベット語であるが、現代チベット語を學び終えた人々によつて開かれるチベット學の將來は大いに期待されてよいだらう。

E. P. H. E. では、二つもチベットに關した講座はあるが、いずれも、高度に専門化した内容をもつため初心者にはとてもついてゆけない。従つて、初級のチベット語はパリの外語大學で現代チベット語を學ぶか或は、自習獨學する以外に方法はない。大體、フランスでの事情は右のようだが、ついでに、これまで書き洩した人々々のことを加えるなら、次のようである。

北歐では、ウプサラに Toni Schmid 女史がいて、Sten Hedin の齎したチベット關係の資料を整理研究している。特に、説話關係や、民俗學的分野での貢獻が顯著である。オスローにはサンズクリットの Nils Simonsson 教授がチベット學を推進してゐる。

大學圖書館には *rin ma pa* 關係の貴重な藏書がある。

コペンハーゲン王室圖書館には古代史の *Erick Haahr* 氏があり、チベット音楽（民俗學）を専攻する *Peter* 王子と共にこの國のチベット學の中核をつとめてゐる。

以上を要するに、戦後のチベット學は、全く新しい時代を迎え、外に對してはチベット學として分野の獨立を得た一方、内側では、分科して専門化の傾向をたどりはじめた。云い方を變えて見ると、探險家による報告なども含めてチベットについての一般的研究は一應一周り一段落したといつたいのである。今後、チベット學者として研究發表などされる方々にこの點充分御認識頂きたいことで、既に、海外で香しくない評判を得ている事實もあることだけお傳へして置きたい。そして、日本のチベット學は、殘念ながら、ヨーロッパに比べて大へん遅れをとつてゐることも率直に認識して頂きたいのである。

（1）諸氏の研究發表題目がなされなかった寄稿

唯識について	安井廣濟
菩薩道と唯識觀	勝又俊教
展開せる緣起觀の體系的考察とその基盤	西義雄
<i>Astapada</i> — <i>Saddharmapundarika</i> 研究ノートから	岩本裕
法華經に於ける「書寫」について	清田寂雲
涅槃經における佛身論	水谷幸正
煩惱について	近藤徹稱
四衆の證悟とその段階	渡邊文麿
手杖論について	武内紹晃
パタンジャリと「ガナ・パータ」—語彙追加提案の採否—	大地原豊
入中論より見たる中觀佛敎の實踐體系	瓜生津隆眞
入中論第六章第八偈—第八〇偈	荒牧典俊
入菩薩行論第九章における <i>Vicāra</i> を廻つて	江島惠教
チベット敎學の戒律論	芳村修基
敦煌出土の彌勒經類	井ノ口泰淳
吐魯番僧侶の敎養問題	小笠原宣秀
竺道生の思想について—注維摩經を中心として—	三桐慈海
嘉祥大師の一乘觀	平井俊榮
捨身の宗教的意義	水尾現誠
	（七七二頁に續く）